

教師の
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄（千葉県公立学校講師）
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

待たないからそろそろ

～関係と環境をデザインすることで学級文化を育てる～

学校生活には、「そうすること」が当たり前になっ
ていている場面があります。それは、学級を安
定させる大切な基盤になります。

例えば朝の会では、日直が前に出て、朝の会
を始めようとします。しかし、まだ話をしてい
る子ども、後ろを向いている子どもがいます。
日直は「静かにしてください」と声を掛けますが、
なかなか全員の気持ちはそろいません。

このとき、本当に問題なのは子どもものでは
うか。もしかすると、子どもではなく、仕組
みの方かもしれません。

今回のテーマは、「待たないからそろそろ」です。

1 「待たない」とこの意味

ここでいう「待たない」とは、子どもが自然に
望ましい行動を選択できるように、教師が先に
関係と環境をデザインするという意味です。
では、問題です。

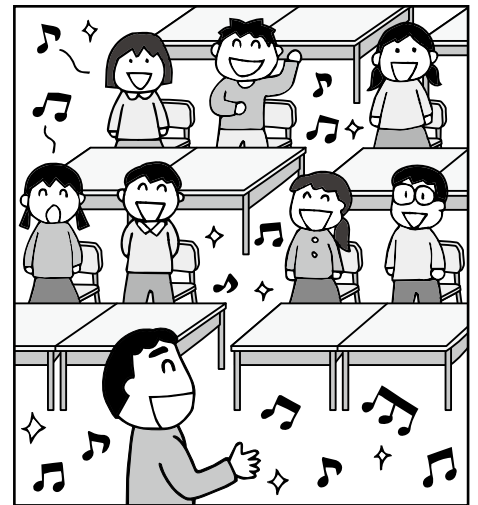
Q1

朝の会が始まらない時、教師はど
うに関わればよいでしょうか。

- ① 教師が日直の隣に立つ
- ② 静かになるまで待つ
- ③ 朝の会の「順番」を変える

①は、とても大切な支援です。

日直は、「みんなで朝の会を始めたい」という
願いを持っています。教師が隣に立つことで、「先
生は日直を大切にしている」「今は日直を支える
場面なんだ」と感じ取ります。子どもたちは日
直の願いを受け止めて行動を変えていきます。



ここで教師が動かしただけは、子ども自身で
はありません。動かしたのは、子ども同士の関
係です。学級文化は、「先生が言うから従う」と
いう関係ではなく、「仲間の役割をみんなで支
える」という経験の積み重ねによって育って
いきます。

しかし「隣に立つ」という効果的な働き掛け
でも、同じ刺激が続くと、子どもは慣れてしま
います。これを心理学では馴化（じんか）とい
います。これを心理学では馴化（じんか）とい
います。

本来育てたいのは、教師を見る子どもではあ
りません。仲間を見る子どもです。だからこそ、
教師の支援は必要な場面で行うことが大切です。
では、②はどうでしょうか。

待つことは教育において大切です。しかし、
ただ待つだけでは問題が起こることがあります。
教師が、「いつ静かになるだろう」「まだかな」
「もう少しかな」と耐え続ける状態になると、待
つことの中心が子どもではなく、教師の我慢に
なってしまう。

本来の「待つ」とは、子どもが考え、自分で
行動を変える時間を保障することです。しかし、

学級全体の関係づくりがないまま待つと、日直
だけが頑張る状態になります。

そこで、③です。朝の会の流れそのものを変
えます。順番を変えるのです。

私は、「挨拶をしてから歌う」という順番を、
「歌ってから挨拶をする」という順番に変えまし
た。これは、単なる順番変更ではありません。
子どもが自然に行動を切り替える環境をつくら
れたのです。

歌が聞こえると、子どもたちは自然に立ち上
がります。これまでの経験から、「歌は立って歌
うもの」と体が理解しているからです。

もちろん、最初から全員が歌うわけではあり
ません。しかし、すでにできている子どもがい
ます。その姿が周囲へ広がります。

教師がやることは、子どものよい行動を他の
子どもが見つけ、それが広がる環境をつくるこ
とです。「歌いなさい」と強制するのではなく、
「歌ってしまっ」流れをつくるのです。

歌い終わる頃には、全員が立ち、前を向いて
います。自然に静けさが生まれ、日直に注目す
る準備ができます。

学級経営とは、子どもを変えることではあり
ません。教師が関係と環境をデザインし、その
中で子ども同士のつながりを育て、学級文化を
形成していくことです。

待たなくても子ども自身が動き出す仕組みを
つくる。それが、「待たないからそろそろ」という
考え方です。

2 帰りの会は、いつするか

時間になっても、帰りの会をなかなか始めら

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

れないことがあります。

原因の一つは、帰り支度の準備の早さが子どもによって違うからです。一生懸命に取り組んでいても、速さには個人差があります。手際よさは人それぞれです。

ここで大切なのは、「遅い子どもをどう早くさせられるか」と考えないことです。子どもには、それぞれ発達の段階や得意不得意があります。教師が変えられる部分と、変えることが難しい部分があります。

個人差があっても全員が安心して過ごせる仕組みをつくるのが、教師の役割です。

Q2

子どもたちの下校が早くなるのはどれでしょうか。

- ① 昼休みに帰りの支度を済ませておく
- ② 帰りの会をしてから帰りの支度を始める
- ③ 全員が準備できるまで待つて帰りの会を始める

①は、一見効率的に見えます。帰る直前の準備時間が減るからです。

しかし、人間の行動は時間だけでは決まりません。ランドセルをロッカーに取りに行くと、「放課後はどこで遊ぶ？」などの会話が始まります。友達との距離が近くなり、肩が触れることで小さなトラブルも起こります。これは、子どもの意識が低いからではありません。環境から影響を受けるのはごく普通のことです。

授業中は、座る、黒板を見る、教師の話を聞くという環境があります。その環境では、子ど

もは集中して行動します。

しかし、立つ、移動する、友達と近づくという環境が変わると、心の状態も変化し、自然な反応として会話が生まれます。「話してはいけないのに話している」のではなく、「その環境では話したくなる」のです。

注意や指導だけでは十分ではありません。行動を変えたいなら、まず環境を見る必要があります。

③はどうでしょう。

これは平等に感じます。しかし、全員を同じ状態にそろえようとすると、別の問題が生まれます。早く準備できた子どもは待つことになり、時間がかかる子どもは焦ることになります。

学級は集団ですが、子どもは一人一人違います。大切なのは、「全員を同じにすること」ではありません。「同じにする部分」と「違ってよい部分」を見極めることです。

そこで、②です。

私はこれを選びます。理由は、子どもを変えようとするのではなく、仕組みを変えればよいからです。

授業終了後、座った状態のまま帰りの会を始めます。子どもが置かれる環境は変わりません。したがって落ち着いた状態を維持できます。

これは、教師が子どもを直接管理するのではなく、環境そのものを足場にする考え方です。子どもは適切な支えがあることで、自分一人では難しいこともできるようにと考えます。

この場合の足場とは、教師の注意ではありません。「自然に落ち着いていられる流れ」です。環境が子どもたちの行動を支えているのです。

帰りの会が終わったら、挨拶をします。その

後は、自分のペースで帰りの支度をし、早く準備できた子どもから下校します。「急がされない」という安心感があるからこそ、子どもは自分の力で行動できます。

この仕組みは学級文化にもつながります。一人一人が自分のペースで準備する中で、早く終わった子どもは友達を急かすのではなく、自分の時間を過ごします。「待つ文化」ではなく、「自分で動く文化」が育ちます。

この実践で教師が変えたのは、子どもではありません。時間の流れです。人の動線です。集団の仕組みです。教師は子どもを直接コントロールするのではなく、関係と環境をデザインすることで学級文化を育てます。

子どもを急がせるからそろうのではありません。安心して自分のペースで動けるから、結果としてそろっていくのです。

待たないから、そろうのです。

